

蔣義喬  
「編著」

# 六朝文化と日本

## 謝靈運という視座から

序言……蔣義喬……………4

### I ● 研究方法・文献

謝靈運をどう読むか——中国中世文学研究に対する一つの批判的考察……………林暁光……………10

謝靈運作品の編年と注釈について……………吳冠文（訳・黃昱）……………29

### II ● 思想・宗教——背景としての六朝文化

「コラム」謝靈運と南朝仏教……………船山徹……………39

洞天思想と謝靈運……………土屋昌明……………45

謝靈運「発帰瀨三瀑布望兩溪」詩における「同枝條」について……………李静（訳・黄昱）……………54

### III ● 自然・山水・隠逸——古代日本の受容

日本の律令官人たちは自然を発見したか……………高松寿夫……………67

古代日本の吏隠と謝靈運……………山田尚子……………80

平安初期君臣唱和詩群における「山水」表現と謝靈運……………蔣義喬……………92

IV ● 場・美意識との関わり

平安朝詩文における謝霊運の受容……後藤昭雄……………108

平安時代の詩宴に果たした謝霊運の役割……佐藤道生……………120

V ● 説話・注釈

慧遠・謝霊運の位置付け——源隆国『安養集』の戦略をめぐって……荒木浩……………129

「ゴラム」日本における謝霊運「述祖徳詩」の受容についての覚え書き……黄昱……………140

『蒙求』「霊運曲笠」をめぐって

——日本中近世の抄物、注釈を通してみる謝霊運故事の展開とその意義……河野貴美子……………147

VI ● 禅林における展開

日本中世禅林における謝霊運受容……堀川貴司……………163

山居詩の源を辿る——貫休と絶海中津の謝霊運受容を中心に……高兵兵……………172

五山の中の「登池上楼」詩——「春草」か、「芳草」か……岩山泰三……………185

VII ● 近世・近代における展開

俳諧における「謝霊運」……深沢眞二・深沢了子……………196

江戸前期文壇の謝霊運受容——林羅山と石川丈山を中心に……陳可冉……………206

「ゴラム」謝霊運「東陽溪中贈答」と近世・近代日本の漢詩人……合山林太郎……………218

# 序言

蔣義喬

謝靈運（三八五〜四三三）の名は、日本ではあまり馴染みがないように思われる。しかし、中国では、六朝時代に生きたこの詩人は、山水文学の祖であるとともに、儒・道・仏に通じた博学多才の人物として知られている。その詩文は後世の文人たちに大きな影響を与えた。さらに、こうした学識と矛盾に満ちた教唆な人生とが相俟って、その人物像についても、中国史上他に類を見ない独自のイメージを形成している。

日本における謝靈運受容の可能性を物語る事例として、直ちに想起されるのは、上代における『文選』の伝来である。平安朝文人が『文選』を文学の指標と捉え、必須の教養として学んでいたことは周知のとおりであるが、そうした文学の最高峰たるアンソロジーにおいて、謝靈運の詩作はきわめて重んじられていた。また、日本と実縁が深い唐詩人の白居易の作に、「読謝靈運」詩があるのも、日本での評価を考える上で興味深いことである。

詩文以外のところで言えば、『徒然草』百八段に、謝靈運が惠遠の白蓮社に入ることを許されなかったという逸話が見える。難解な記述であるが、謝靈運その人に対する関心が窺われる。さらには、日本古代における

山居観の形成に、六朝文人貴族の生き方や趣味の様式が密接に関わっていたことが指摘されているが、そうした関わりにおいて、謝靈運の「山居賦」や山水詩が大きな役割を果たしたであろうことが当然推想されよう。思うに、謝靈運とその詩文は東アジア漢字文化圏で共有されていた文学・文化的財産に違いないのである。

だが、謝靈運について、日本文化・文学研究において、その受容への着目は稀であったと言わざるを得ない。わずかに見出されるのは、主に日本中世の説話文学と五山文学研究の射程においてである。<sup>(2)</sup> また、謝靈運に対する考究が積み重ねられてきた中国における文学研究の領域においても、近年は停滞感が否めない。たとえば、テクニストをいかに読むのか、「山水詩人」と呼ばれるほどに、大量かつ特徴的スタイルを持つ詩を謝靈運自身に産出させた原動力は何かというような、素朴ながら根本的な問題へのさらなる検討が待たれよう。

このような問題意識に基づき、二〇一七年九月、北京師範大学東アジア文化研究所は、ワークショップ「謝靈運を中心とした六朝詩と日本文学」を開催した。本書の企画は、この研究集会のテーマとアプローチに由来する。謝靈運自身の思想的な背景となった六朝期の仏教や道教にも目を向けつつ、日本文学における謝靈運受容の軌跡を追い、六朝文化の日本における受容のあり方を体系的に検討する足がかりとなるよう企図するものである。

以下、各部の内容について簡潔に紹介する。

I 「研究方法・文献」では、中国文学における謝靈運研究の成果と動向を概観する。

林晓光氏の「謝靈運をどう読むか——中国中世文学研究に対する一つの批判的考察」は、中国大陸の謝靈運研究史をまとめつつ、現存する問題に対して鋭意論評を加え、中国中世文学研究の将来をも展望している。

呉冠文氏の「謝靈運作品の編年と注釈について」は、現存する作品の伝本を概観し、謝詩に対する前代の作品の影響、また編年の問題点について見解を述べている。

II 「思想・宗教——背景としての六朝文化」では、作品成立当時の仏教と道教を射程に据えて、謝靈運の活

動・価値観・時間概念などについて、アプローチする。

船山徹氏の「謝靈運と南朝仏教」は、頓悟と漸悟をめぐる論争と、『大般涅槃經』の修訂から、謝靈運の活動が、変動期にあった南朝仏教史から見ても意義あるものであったことを論じ、これまで取り上げられてこなかった謝靈運の「翻經台」伝承を紹介する。

土屋昌明氏の「洞天思想と謝靈運」は、謝靈運の「羅浮山賦」が道教經典『茅君内伝』の記述を踏まえていることから、洞天思想の着想を指摘する。そして經典披見の歴史的経緯、さらに当時の知識層に見える洞天的思考方法の普及についても述べる。

李静氏の「謝靈運「発帰瀨三瀑布望両溪」詩における「同枝條」について」は、当該詩のことは「同枝條」が、人間ではなく仙人を指していることを証明し、またその背景に六朝の地仙思想を挙げる。

Ⅲ「自然・山水・隠逸——古代日本の受容」では、上代から平安初頭までの和歌、漢詩、漢文における謝靈運受容の状況をみる。

高松寿夫氏の「日本の律令官人たちは自然を発見したか」は、謝靈運が自然を発見したきっかけとして地方への赴任が提起され、地方官の赴任する機会が多い七世紀末から八世紀初頭という時期の日本の言説に、新たな自然観や自描写は認められるかどうかを検討する。

山田尚子氏の「古代日本の吏隠と謝靈運」は、賀陽豊年「小山賦」における「吏隠」の在り方を晰出した上で、初唐の李嶠の詩との関連を看取しながら、謝靈運「齋中讀書」の発想が影響した可能性を指摘する。

蔣義喬の「平安初期君臣唱和詩群における「山水」表現と謝靈運」は、嵯峨詩壇で製作された「山水」の表現に注目し、それが『文選』、および六朝詩を継承した唐詩群を媒介として、謝靈運と密接に関わっているとみる。

Ⅳ「場・美意識との関わり」では、平安中期から後期までの日本漢詩文を対象とする。

後藤昭雄氏の「平安朝詩文における謝靈運の受容」は、「潘謝」の語を通して見えてくる謝靈運の捉え方、そして数々の句題に謝靈運の佳句が登場すること、さらに源順が謝靈運「擬魏太子鄴中集詩序」をその基幹に据えて文章を書いていること、ないしその意図について分析する。

佐藤道生氏の「平安時代の詩宴に果たした謝靈運の役割」は、当時の日本人が謝靈運「擬魏太子鄴中集詩序」の提唱する詩宴の理想像・美意識を抛るべき先蹤として、自らの詩宴を構築したことを具体的に示す。主催者の資質という要素がもつとも重要であることを論じる。

V 「説話・注釈」では、中近世の文献を中心に、謝靈運をめぐる言説を広く探る。

荒木浩氏の「慧遠・謝靈運の位置付け——源隆国『安養集』の戦略をめぐる」は、浄土教書『安養集』序文が謝靈運を「高士」として、慧遠に併置していることに、隆国の源信『往生要集』に対する対抗意識を認める。それとともに、宋代以降の謝靈運像の変化と日本における謝靈運認識のズレにも着目する。

黄昱氏の「日本における謝靈運「述祖徳詩」の受容についての覚え書き」は、『文選』所収「述祖徳詩」の特殊性を指摘した上で、中古から中世にかけての漢詩文・注釈を中心にその受容例を洗い出し、表現上の受容のほか、辞官の表など漢詩文の文脈における当該詩の受容の可能性を提起する。

河野貴美子氏の「蒙求」「靈運曲笠」をめぐる——日本中近世の抄物、注釈を通してみる謝靈運故事の展開とその意義——は、中近世の『蒙求』講義を代表する『蒙求聴塵』と『蒙求詳説』における「靈運曲笠」故事の展開をたどることによって、日本における『蒙求』の受容や学習のありようを描く。

VI 「禅林における展開」では、五山文学における謝靈運受容の全体像をつかむと同時に、その具体相を照射する。

堀川貴司氏の「日本中世禅林における謝靈運受容」は、日本中世禅林の僧侶たちの読書範囲の中で、謝靈運に関する記述を考察し、当時知られていた謝靈運の逸話を網羅的に紹介する。

高兵兵氏の「山居詩の源を辿る——貫休と絶海中津の謝靈運受容を中心に」は、絶海中津と貫休の「山居詩」という二組の連作の関連性と類似性を比較考察する。そしてその源に謝靈運の「山居賦」があることを指摘することによって、中日仏教山居詩の系譜を完成する。

岩山泰三氏の「五山の中の「登池上樓」詩——「春草」か、「芳草」か」は、謝靈運「登池上樓」詩が、詩禅一致論の立場から五山詩の正本とされると同時に、謝靈運と恵連の故事が、協同体にある禅僧たちの関係に重ねられていたことを指摘する。

Ⅶ「近世・近代における展開」では、近世から近代にかけての謝靈運受容・変容の様相をみる。

深沢眞二・深沢了子氏の「俳諧における「謝靈運」」は、俳諧において、謝靈運の故事が『蒙求』の「靈運曲笠」を通していかに利用されていたのか、謝靈運は蕪村によっていかに脱俗風雅の人として作品化されたのかを論じる。

陳可冉氏の「江戸前期文壇の謝靈運受容——林羅山と石川丈山を中心に」は、明版書籍の伝来と流布という背景のもとで、林羅山と石川丈山の詩文創作に焦点をあて、江戸前期文壇における謝靈運受容の様相を明らかにする。

合山林太郎氏の「謝靈運「東陽溪中贈答」と近世・近代日本の漢詩人」は、謝靈運の作として、よく知られたものではない艶詩「東陽溪中贈答」が近世・近代では注目を集めていたことを指摘し、当時の漢詩壇の好尚を絡めつつ議論する。

日本における中国文学の受容状況に関する研究は、総じていえば、白居易をめぐる問題に集中している。白居易以外の中国詩人について検討することは、日本文学の歴史や特質についての多角的・多元的な把握を目指すそうとする試みに寄与することができようであろう。これまで、謝靈運は、ほぼ中国文学の分野においてのみ研究対象とされてきた。本書は、謝靈運を日本文学あるいは中日比較文学研究のテーマとして大きくとりあげる

初めての試みである。さらに、「六朝文化と日本」という本書のテーマは、日本における六朝文化・文学の受容と展開を説明することを企図するものであるが、中国文学研究の一助ともなっていれば幸いである。

謝靈運という座標軸が斬新かつ意欲的であるだけに、それに対するアプローチは想像以上の困難さを伴った。ここで、執筆に携わった方々に心より感謝と敬意を申し上げたい。また、勉強出版の吉田祐輔氏には、本特集の企画から編集までひとかたならぬお力添えをいただいた。記して御礼を申し上げます。

注

- (1) 小野恭平「中古の文学作品からみた山里の基本的イメージとその美について——文学作品からみた我国の山居観——その1・その2」(『日本建築学会計画系論文報告集』三九三号・四〇四号、一九八八年十一月・一九八九年十月)、廣岡義隆「奈良における山居観の形成」(『三重大学日本語学文学』二二、二〇一二年六月)。
- (2) 山崎誠「謝靈運筆儒説攷」(『国文学研究資料館紀要』三三〇、二〇〇四年二月)、太田亨「日本中世禅林における謝靈運受容——初期の場合」(『中国古典文学研究』四、二〇〇六年十二月)、荒木浩「謝靈運の宋代——源隆国『安養集』と『徒然草』をめぐる」(『日本と『宋元』の邂逅——中世に押し寄せた新潮流』アジア遊学一二三、勉強出版、二〇〇九年五月)、岩山泰三「五山の中の『少年易老』詩」(『休詩の周辺——漢文世界と中世禅林』勉強出版、二〇一五年)など。